

第 11 話 青春映画作家・山根成之の時代

●『愛と誠』を一作で降板した西城秀樹

ところで、70年代中盤の歌謡界には、60年代半ばの歌謡御三家ブーム、60年代後半のGSブームに続く一大アイドルブームが起きていた。活況の源となったのは野口五郎、西城秀樹、郷ひろみの「新御三家」と、森昌子、桜田淳子、山口百恵の「花のトリオ」であり、彼らの出す曲出す曲、ことごとくヒットする。

他にも、浅田美代子、片平なぎさ、岡田奈々、林寛子などの少女歌手、フォーリーブス、「ずうとるび」といった少年グループが人気を集め、これらアイドル歌手の姿がテレビの画面に登場しない日はなかった。

彼らを映画に起用する動きに先鞭をつけたのは再び青春映画路線を模索し始めていた松竹である。先に触れた『としごろ』『ときめき』『しあわせの一番星』『あした輝く』を73年から74年にかけて送り出すとともに、西城秀樹主演で週刊少年マガジン連載の大ヒット劇画(連載73~76)を映画化した『愛と誠』(74 山根成之 脚・石森史郎+山根成之 原・梶原一騎、ながやす巧)を企画した。

55年生まれで72年に歌手デビューした西城秀樹は、73年の「情熱の嵐」「ちぎれた愛」「愛の十字架」で三連続ヒットを飛ばして「ヒデキ」の愛称で人気を呼ぶ。翌74年には「激しい恋」「傷だらけのローラ」をヒットさせ、NHK紅白歌合戦に初出場を果たした。

その人気をかって、浅田美代子の『しあわせの一番星』に顔を出して映画デビューした後、初の主演作として用意されたのが『愛と誠』だった。幼い日に因縁がある東京のお嬢様・早乙女愛と雪国の不良・太賀誠が出会い、富豪である父の力を借りて愛は誠を東京の自分が通う名門高校へ転校させる……。真実の愛とは何か、といった見ていると気恥ずかしくなるような命題が堂々と繰り広げられ、漫画表現なら成立するそれが映画となるといささかオーバーに感じられてしまう。2012年に妻夫木聡と武井咲のコンビで再映画化された際、三池崇史監督がミュージカル仕立てにするという破天荒な方法で挑んだのも、この点に起因していると思われる。

そのせいか、興行成績が良く続編、完結篇とシリーズ化されたにもかかわらず、西城は誠役を降板し、『おれの行く道』(75 山根成之)で大女優・田中絹代と共演する。田中の演じる一人暮らしのおばあちゃんを兄弟姉妹たちの中でただひとり面倒を見ようとする青年役でいいところを見せた。以後、歌手としては大活躍しながらも、『傷だらけの勲章』(86 斎藤光正)で11年ぶりに主演するまで映画からは離れる。

●早乙女愛の代表作『港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ』

対照的に映画で売り出したのは、『愛と誠』でヒロイン公募の4万人近い難関を突破して西城の相手役を務めた鹿児島県の田舎の高校1年生だった。早乙女愛という役名をそのまま芸名にした彼女は一躍人気スターとなり、『続・愛と誠』（75 山根成之）では南条弘二、『愛と誠・完結篇』（76 南部英夫）では加納竜を相手に愛役を演じきる。

その代表作はダウタウン・ブギウギ・バンドの大ヒット曲を映画化した『港のヨーコヨコハマ ヨコスカ』（75 山根成之 脚・山根成之＋南部英夫 原・阿木耀子）である。「港のヨーコ ヨコハマ ヨコスカ」というコーラスをバックにモノローグが続いていく曲を基底として、歌詞そのままに物語が組み立てられる典型的歌謡映画構造をとった軽快なロード・ムービーだ。

母を亡くし身寄りはいなくなった少女さとみ（早乙女愛）は、家出したまま行方の知れぬ姉ヨーコ（画面に登場せず）を探しに鹿児島の片田舎からやってくる。横浜で会った今はチンピラ暮らしの同郷年長の幼なじみ吾郎（谷隼人＝彼も鹿児島出身）はさっさと田舎へ帰れと言うが、さとみは噂を頼りに横浜、横須賀と姉を捜し歩く。

その過程でゴーゴークラブのママ由香（松坂慶子）と知り合ったことから、大金の賭けられたゴーゴードダンス大会をめぐる争いに巻き込まれる。さとみはダンサーをしていたというヨーコの後を継いでダンスに挑み、姉のライバルだった紀子（多岐川裕美）の育てた後輩マリ（原田美枝子）との対決に勝った。敗れたマリが自殺してしまうほどの熾烈で苛酷な争いだったが、こうした経験を経てさとみはしたたかになっていく。

ようやくヨーコの話が知れたものの、近々外国へ旅立つという。駆けつけたときには、既にヨーコを乗せた船は出て行ってしまっていた。ついに会えなかったわけだが、さとみは少しもめげない。姉に頼らなくても独力で生き抜いていく自信がついたのである。都会の生活にくたびれ果てた吾郎と一緒に鹿児島へと帰って行く。

そして、話が終わったと思わせた後のラストシーン、「三年後」の字幕とともに大きなお腹を抱えて桜島に見える道を歩く彼女の姿が一瞬だけ示される。見落としてはならない。その既に母親の強さ、逞しさを感じさせるような堂々たる足どりが、物語の終わりにくつきり捺された刻印になっている。その力強さの前には「港のヨーコ」も「ヨコハマ」も「ヨコスカ」も、それら虚飾の世界はどこかへ吹っ飛ばされてしまう。みごとな青春成長譚となっていた。

ただ、その後の早乙女は主演作に恵まれず、岡田奈々、秋野暢子とトリオでの『青春の構図』（76 広瀬襄）の後は助演に回るようになっていく。再び主演するのは、日活ロマンポルノの『女猫』（83 山城新伍）であり、これを機に大胆な演技のできる大人の女優に変貌した。

なお、ライバル役の原田美枝子は前年16歳のとき、東宝配給の独立系作品『恋は緑の

風の中』(74 家城巳代治)の中学生役で裸身を披露して鮮烈なデビューを飾っており、この映画の翌年、松竹配給の独立系作品『大地の子守歌』(76 増村保造)、ATG 作品『青春の殺人者』(76 長谷川和彦)で堂々たる主演ぶりを見せ、新人賞を飛び越してキネマ旬報主演女優賞を弱冠 18 歳にして受賞する。

早乙女と原田が闘うゴーゴークラブは、今日のようにタイやフィリピンに多い性風俗店を意味するものとは全く違い、60 年代が発祥の音楽やダンスを楽しむディスコ的一种である。ゴーゴークラブと称するクラブ専属の女性ダンサーが人気を呼んだ。この直後にディスコブームが起こり、この種の店はディスコと呼ぶのが普通になった。78 年に日本公開されたジョン・トラボルタ主演のアメリカ映画『サタデー・ナイト・フィーバー』(77 ジョン・バダム)はブームに拍車をかけ、各地にディスコが林立して「ディスコでフィバー」「フィーバーする」が流行語となる。

●御三家のひとり、野口五郎も青春映画に参戦

西城秀樹と並ぶ新御三家のひとり野口五郎は、56 年生まれで 71 年歌手デビュー。「青いリンゴ」が初ヒットとなり、翌 72 年「めぐりあう青春」で当時として史上最年少の 16 歳での NHK 紅白歌合戦出場を果たす。73 年「めぐり逢う青春」、74 年「甘い生活」、75 年「私鉄沿線」とヒットが続いた。

そして『再会』(75 斉藤耕一 脚・斉藤耕一+仲倉重郎)でいきなり主演デビューする。野口のもう 1 本の主演作『季節風』(77 斉藤耕一)はいかにもアイドル映画らしい他愛ない物語だったがこちらは一種の心理劇であり、五郎ファンの中学生、高校生の少女たちにはいささか難しすぎると思われる内容になっている。

賢(野口五郎)は早くに両親を失い、ホステスをしている姉の葉子(江波杏子)に育てられてきた。賢が就職しなにか一人前になったのを見届けた葉子は、一緒にブラジルへ移住しようという恋人の申し出を受け入れようとする。五十路で事業に失敗し警察からも追われる身である恋人・小沼(池部良)と横浜の小さな宿で落ち合い、密航同然で旅立とうとしていた。

賢は姉を奪われるような気になり我慢できずに横浜まで無理矢理ついてくる。待ち合わせの場所に来ない小沼への不信感から葉子と喧嘩になり、飛び出した夜の街をさまよった末、宿に戻ると姉たち二人は情事の最中だった。再び飛び出す賢。追いかけてきた葉子の懇願で小沼と対面するものの、どうしても彼を信頼できずに二人の前から去る。

公園で会った小さな女の子と仲良しになってその純真さに触れ、幼い頃姉に守られて育った記憶を甦らせて旅立ちを許そうと思ひ直す。ところが女の子を連れ歩いている様子を誘拐と間違われ警察に捕まり留置場に泊められてしまう。誤解がとけ釈放された彼は姉たちを見送ろうと波止場へ急ぐが、船は既に出てしまっていた。遠ざかっていく船影を眼で

追いながらようやく姉の前途を心から祝福する気持ちになって、自分は自分なりの人生を踏み出す決意をするのだった。

ここで描かれているのは、姉を慕い、頼り、その傍から離れられないでいた少年が、いつしか固有の自我を確立させていく過程である。姉と自分とが唯一の肉親ではあっても結局は別個の存在であり最終的には異なる軌跡を辿って人生を送らなければならないことを、彼は思い知る。これもまた、若者の成長物語なのだった。

映画初出演の野口が、まだ拙い演技で江波杏子やベテラン俳優池部良にぶつかっていくのが、少年が姉やその恋人との人生経験の差を痛感する過程と重なって見えた。斉藤耕一監督は歌謡御三家やグループサウンズ(GS)の映画を多数手がけていたが、岸恵子と萩原健一共演の『約束』(72 斉藤耕一)、周囲にベテラン陣を配して新人・高橋洋子の演じる少女の四国遍歴を追った『旅の重さ』(72 斉藤耕一)で芸術映画の作家として認められ、江波杏子主演の『津軽じょんがら節』(73 斉藤耕一)ではキネマ旬報ベストテン第一位に輝いていた。その斉藤監督が昔手慣れたアイドル映画に戻り、周囲に手練れの役者を配することで野口の魅力を引き出したのである。

ただ、前述のように野口五郎の映画出演は主演作2本に終わってしまった。90年代以降何本かに助演で出演しているが、それはアイドルとしてではない。

●ジャニーズのアイドルグループは東宝で主演作

歌謡界のアイドルブームに着目したのは、なにも松竹だけではなかった。

東宝は、フォーリーブズで『急げ！若者』(74 小谷承靖 脚・田波靖男)を製作した。今をときめくジャニーズ事務所の初期の人気グループである。事務所創設者ジャニー喜多川が初めて手がけたグループが真家ひろみ、飯野おさみ、中谷良、青井輝彦(現・あおい輝彦)という14歳から15歳の4人の少年によるジャニーズだった。62年から67年まで活動したこのグループのバックダンサーに選ばれた4人が、バトンを引き継ぐようにフォーリーブズとして67年にデビューする。

「コーちゃん」北公次、「ター坊」青山孝、「トシ坊」江木俊夫、「マー坊」おりも政夫は、このとき13歳から18歳。このうち江木は4歳でデビューした名子役として知られ、『天国と地獄』(63 黒澤明)での三船敏郎の息子役は有名だ。70年「あしたが生まれる」でNHK紅白歌合戦初出場し、71年には「地球はひとつ」がヒットするなど70年頃から絶大な人気を誇っていた。

『急げ！若者』は、孤児院で育った4人の少年が歌手グループとしてデビューすることになる過程を描くGS映画によくあった話の構造である。4人は上京して就職し、それぞれ歌手、コック長、デザイナー、レーサーという夢をめざして一生懸命働く。彼らの歌を吹き込んだテープを聴いた芸能プロが話を持ちかけてきてデビューが決まり初リサイタル

を開く直前、トラブルで1人が命を落とす。それを乗り越え、孤児院の後輩を代役に立ててみごとにステージを務めるのだった。

当時のわたしは、キネマ旬報「読者の映画評」にこう書いている。

【初のリサイタルを前に、メンバーの一人が、一度足を踏み入れていたヤクザの仲間から難癖をつけられる。喧嘩になり、はずみで刺されて死んでしまう。劇中の“フォーリーブス”の危機だ。

集まった観客の前で、その北公次の抜けた穴を、後輩の郷ひろみが埋める場面が、クライマックスになる。北公次の場所に空白のスポットライトが当てられて、主題歌「急げ！ 若者」が歌われる。リサイタルは大成功—と、ここで終わるならば、この物語は平凡なお子様向けミュージカルの域を出なかっただろう。

続くラストシーンに、見事などんでん返しが用意されている。残った三人が、たった一日でスターの座を棄て、コック長、デザイナー、レーサー、というそれぞれの夢をめざして、元の平凡な若者に戻るのだ。“ニュー・フォーリーブス”（彼らの二役！）と、それに熱狂する少女たちに背を向けて歩き始める彼らの表情は、いかにもさわやかだ。

はじめ、彼らは“急ぐ”若者たちだった。職業の夢を、あまりにも性急に実現させようとして、挫折した。ヤクザに堕ちてしまう者が出たのも、そのせいだ。ひょんなことから人気歌手への道を進むようになると、いっそう“急ぐ”のを余儀なくさせられた。歌、踊りの練習と、スター即成課程は目まぐるしく忙しい。敏腕企画家を敷いた線路の上を、超特急で駆け進むのだ。

ラストシーンで、初めて、彼らは“急ぐ”のをやめる。足を地につけ、ゆっくりと、自分のペースで歩き出す。そのとき、甘えのない逞しい若者として、新しい生き方が始まるといえる。

だから『急げ！ 若者』とは、鋭い反語だ。小谷承靖監督以下の作者たちの、ぼくたち若者への、やさしい、それでいて甘くはない視線を、ぼくはこの反語の中に感じ取ることができる。】
(キネマ旬報 75 年一月下旬号)

この映画を観たのは大学4年の夏休み。ちょうど就職試験シーズンだった。文部省（当時）に入りたくて公務員試験を受けている最中である。まだ将来が固まらず、主人公たちと同じく自分で夢を持ってはいても、それが実現するかどうかあやふやな状態のときだ。その意味で共感するところが大きかったのだろう。

フォーリーブスの映画主演作はこれ1作で、グループも78年に解散した。その後、北公次が個人として『悪魔の手毬歌』（77 市川崑）、『竜二』（83 金子正次）などいくつかの映画に出演している。

●原作＝遠藤周作、監督＝山根成之、主演＝郷ひろみ、の秀作

さて、『急げ！若者』で代役として舞台に立つ後輩を演じたのが新御三家のもうひとりとなる郷ひろみである。55年生まれの郷は、ジャニーズ事務所にスカウトされ72年NHK大河ドラマ「新・平家物語」で役者デビューし、同年「男の子女の子」で歌手デビューして日本レコード大賞新人賞を受賞する。73年にはNHK紅白歌合戦に初出場、74年の「よろしく哀愁」も大ヒットしフォーリーブズを凌ぐほどの人気を得ていた。この映画でも、主演の4人に決して劣らぬ存在感を発揮している。

その郷ひろみ初めての主演作は、松竹での『さらば夏の光よ』（76 山根成之 脚・ジェームス三木 原・遠藤周作）である。「沈黙」66で谷崎潤一郎賞を受け作家としての声望を確立した遠藤周作の作品は、この時点において『日本の青春』（68 小林正樹 原作題名「どっこいショ」67）、『私が棄てた女』（69 浦山桐郎 原作題名「わたしが・棄てた・女」64）、『沈黙 SILENCE』（71 篠田正浩 原作題名「沈黙」66）と錚々たる監督による文芸映画として映画化されていた。

その遠藤周作作品が、初めてアイドル青春映画の原作として使われるのである。中学時代からの遠藤周作ファンだったわたしでなくとも、期待したくなる。ましてや、作中で少年院に入る設定があるためにトップアイドル郷ひろみが坊主頭になったことが芸能マスコミで大きく報道されたとなるとさらに期待は高まった。相手役は秋吉久美子でもあるし。

期待に違わぬ秀作だった。題名の「夏の光」とは青春のきらめきの象徴だろうが、その「夏の光」のまっただなかにいる若者たちの姿を、日向の部分も陰の部分も鮮やかに描き出す。

いろんな職を渡り歩き、女の子にすぐちょっかいを出したりして気楽に生きている宏（郷ひろみ）。引っ込み思案で風采はあがらないけれど働いて生活費を稼ぎながら一流大学を目指している受験浪人の野呂（川口厚）。憧れの都会へ出てきて一人暮らし、ウェイトレスをしながら夜はデザイナーになる勉強をしている京子（秋吉久美子）。この三人が主人公である。

三人とも、ことさら大それた夢を抱いているわけではない。せいぜいワセダに合格したいとか、素敵な恋をしたいとかのささやかなものだ。だが、ささやかな希望であってもそれに没入できるのは若さの盛りの勢いだろう。彼らは、ごく平凡ではあっても明るくみずみずしい気持で生活を送っている。アルバイトと受験勉強に明け暮れる野呂でさえ、苦学生という連想しがちな暗く屈折したところはなく、気のいい真面目優等生っぽい。

宏も元は野呂と同じ予備校に通っていたのだが、いつのまにか進学を諦めてしまい目的もなくぶらぶらしていた。そんな彼を野呂は自分の下宿に置いてやり一緒に暮らしている。宏も、中途半端な自分と隔てなく付き合ってくれる野呂のことを兄のように慕い頼りにし

ている。

宏は、アルバイト先で一緒になった京子と親しくなり早速デートの約束をした。ところが待ち合わせ場所に向かう途中、以前の因縁がある不良たちと遭遇して袋叩きにされてしまい、代わりに野呂が出かけていく。京子に会った野呂は、彼女に一目惚れした。女性に対してうぶな彼は、すっかり夢中になる。

そこで宏は野呂の恋のコーチをしてやり、京子には彼と付き合うよう頼み込む。宏自身京子を愛しており、また彼女の自分に対する愛情にも気づいているのに、野呂との友情に殉じて譲ってしまうのである。ついには見え透いたお芝居で悪役を演じてまで二人を結びつけようとする。

京子は、宏の画策に反発しいったんは拒むものの、結局は捨て鉢な気分になってさほど好きでもない野呂と結ばれる。野呂もまた、宏と京子との間の愛情を薄々感じているのに彼女への慕情に流されて譲られるままに近づく。三人の誰もが、自分や他の二人の真情に対して不誠実だと言わざるを得ない。この不誠実が皆の心にわだかまり、三人の関係はぎくしゃくしてくる。

野呂と京子は、狭いが小綺麗なアパートで同棲生活を始める。一段落して宏が新居を訪ねていくと、野呂から、京子の妊娠と彼の受験が終われば正式に結婚することを告げられた。よかったじゃないか！ と野呂を祝福する宏だが、二人ともどこかぎこちない。

そこへ、勤めを辞める挨拶に行っていた京子を取り乱した姿で駆け込んでくる。以前から彼女に対し邪心を抱いていた店長に襲われそうになったという。カッとなった宏は店まで飛んで行き、卑劣な店長に殴りかかる。そのとき、追いついてきて乱闘を止めようとした野呂が、はずみで店長に意識不明の重傷を負わせてしまった。

それを相手が死んだと勘違いした彼らは、すっかり動転する。野呂には京子も生まれてくる子どももいる。それに自分は未成年だから、と宏は身替わり犯人を買って出た。最初は固辞した野呂も、やっと得た幸福な生活を壊すのが怖さにその申し出に甘えてしまう。

しかし、そんなその場しのぎの偽りがいつまでも通用するはずはなかった。意識が回復した店長の証言で身替わりが発覚し、野呂は逮捕される。アパートに刑事が現れたとき、彼は良心の呵責から逃れられる安堵の表情になり素直に頭を垂れた。

少年院を出所したその足で拘置所へ面会に来た宏に向かい、野呂は三人がそれぞれ自分を誤魔化していたんだと言い、むしろさっぱりした顔で京子を頼む、と託す。

一方、身替わりの件を全く知らされていなかった京子はたいへんな衝撃を受けていた。心労のあまり発作的に大量の睡眠薬を飲もうとしたところへ、ちょうど宏が来合わせる。制止されて、京子は宏にすがりつく。宏はとうとう、好きだ！ と心から叫び、二人はそのまま結ばれようとする。

そのとき、胎内に宿る野呂との子どもが動くのを京子は感じる。「動いた……」との京子の言葉で二人は我に返り、身を離す。

宏は、母と幼い自分を棄てた実の父親である開業医のところへ赴き、決して頼るまいと心に誓っていたプライドをなげうって金をせびり取る。野呂の保釈金にするためだ。ところが、保釈金を届けに行くと野呂が数日前に喘息をこじらせて急死したことを告げられた。

葬式の後、宏は京子に、結婚して野呂の子を育てようと提案する。しかし京子は、自分が愛していたのは野呂で子供は郷里で産むと断った。京子は、お腹の子を抱えて独り東京を離れ田舎に帰る。宏は、ただそれを見送るしかない。夏になったら訪ねて行くよ、という宏のすがるような言葉に対しても、京子は哀しげにかぶりを振った。

「わたしたちの夏は終わったのよ」

郷ひろみは、この映画で役者としての高い資質を示した。歌いながら激しいダンスを披露するステージそのままに肢体を躍動させ、全盛のアイドルスターが自然と発散する勢いというものがほとぼしり出る。また、直情径行の率直さの中にどこか憂いの深さを感じさせる表情からはナイーブでしなやかな感性が伝わってくる。

激しく降りしきる雨の中で野呂に罪の身替わりを申し出る場面、いくらなんでもそんなことはさせられない、と断られて「頼むよ、野呂ちゃん」と懇願する。「俺は、お前や京子ちゃんの役に立ちたいんだ」。ずぶ濡れのまま精一杯の思いを込めて叫ぶのが少しもわざとらしくなく、すんなり受け止められるのである。

相手役の京子を演じる秋吉久美子とのコンビネーションも絶妙だった。「シラケ女優」とされていた彼女が青春の「夏の光」のまっただ中に置かれ、それまでの共演者と違い若さをストレートに噴出させる郷ひろみとぶつかる。そこから、秋吉の演じる新しいヒロイン像が生まれた。

好きな相手から別の男と付き合ってくれないかと言われて戸惑い、なじるように見つめる。そのときの、危ういまでに揺らめく視線、支えを失ったような表情がみごとにヒロインの心象を表現する。またラスト、口ではきっぱりと別れを告げながら、どこかせつない気持を表してみせるのも、彼女のゆらめく視線と表情なのである。

なお、野呂役を好演した川口厚は父が作家・川口松太郎、母が女優・三益愛子、長兄の川口浩、次兄の恒、姉の晶も皆俳優という一家に育ち、何本かの映画に顔を出していたが本格的出演は残念ながらこれだけとなった。この作品の後、引退している。

そして『さらば夏の光よ』は、アイドル歌手主演映画として初めてキネマ旬報ベストテンに選出される。第9位とはいえ画期的なことだった。アイドル青春映画の枠を超えた高い評価を得たのである。

すぐに主演第2作が企画されたのも無理からぬ。77年のお正月映画として『男はつらいよ 寅次郎純情詩集』(76 山田洋次)の併映で公開された『おとうと』(76 山根成之 脚・水木洋子 原・幸田文)は、岸恵子、川口浩が姉弟役でこの年のキネマ旬報ベストワンなど数々の映画賞に輝いた名作『おとうと』(60 市川崑)の同じ原作、脚本によるリメイク

である。

岸恵子の姉がメインだった前作と違い、こちらは郷ひろみの弟が前面に出て姉を 76 年の NHK 朝ドラ「雲のじゅうたん」に主演して一躍有名になった浅茅陽子が演じている。ここでも郷のしなやかな個性が注ぎ込まれることによって、文芸名作に青春映画の息吹が感じられた。ただ、描かれる大正末から昭和初頭という時代はあまりにも古く、周囲の大人たちのキャスティングが新劇系のベテランで固められたために映画全体に堅い印象が出てしまったのは否めない。

●郷・秋吉コンビ再び

やはり郷ひろみの魅力を十分に生かせるのは現代を舞台にしたものだ。松竹 77 年ゴールデンウィーク興行のメインとなった次の主演作『突然、嵐のように』（77 山根成之 脚・中島丈博+山根成之）は、オリジナル脚本によって 1977 年の日本社会を生きる若者たちを鮮やかに描き出した。

日出男（郷ひろみ）は、町の片隅でチンピラまがいの生活を送っている若者だ。詐欺師の片棒をかついだり仲間の高橋（佐藤蛾次郎）とパチンコ屋通いをしたりして暮らしている。その彼が交通事故を起こして入院し、看護婦の由紀（秋吉久美子）と知り合う。

由紀は大きな病院で准看護婦として働きながら、正看護婦目指し通信教育で勉強に励んでいた。女たらしの医師に誘惑されかかったり享乐的に生きている同僚に小馬鹿にされたりしながらも、健気に生きている。

後日、偶然の出来事から日出男と由紀は再会する。下着泥棒をやり損ねて持ち主からとっちめられている高橋を日出男が助けようとする、その相手が由紀だったのだ。日出男の自由な生き方が由紀にはもの珍しくて興味を惹かれ、すぐに二人は恋人同士になった。今は正看護婦になり場末の産婦人科に勤めている由紀は、日出男に対し正業に就くことを一生懸命勧める。人は生きている意味を見つけないといけない、などと自信たっぷりに言われると、日出男もその通り真面目にならなければならないように思えてくるのだった。

そんな頃由紀は久々に帰郷することになり、日出男もなんとなく一緒について行く。暗い波、鉛色の空の日本海、由紀の故郷・福井の田舎町は彼女を温かくは迎えてくれなかった。母（千石規子）は由紀を連れ子にして安料理屋の女将の座に納まった身であり、今の夫やその実子たちに気兼ねして彼女に辛く当たる。そのうえ、以前から由紀に目をつけていた腹違いの兄から襲われそうになる。

傷心の由紀を慰めるうち、その晩二人は結ばれる。一緒に暮らさないか、と日出男が言い出し、一念発起して運送会社に就職して粗末な部屋だがアパートを借りた。初出勤から戻った夜、日出男は由紀が少女の頃から愛読していたという「ジェイン・エア」の新しい本をプレゼントする。由紀が思い切って張り込んだすき焼きでお祝いし、二人のつましい

新生活が始まった。

しかし、ささやかな幸福も長くは続かない。スピード違反で免許停止をくい、日出男は勤め先をクビになってしまいます。それを由紀に言い出せぬまま隠れて他の職を探すが、なかなか見つからずにイライラするばかりだ。

そんなとき、由紀の妊娠がわかる。日出男は堕ろせと言ひ、由紀は産むと言う。日出男は失業を打ち明けて無理だと言うが、それでも産むと由紀は言い張る。混雑した蕎麦屋で言い争っているから店中の客が注視しているというのに、とうとう声を荒げて喧嘩になる。絶望して席を立った由紀は、急に飛び出した店外の道で車にはねられてしまう。

たいした怪我ではなかったものの、お腹の子は流産した。謝る日出男を由紀は優しく許す。とはいえ、彼女の入院費をなんとかしなくてはならない。奔走するがどうにもならず思い余った末、高橋と組み恐喝で金を工面しようとして脅した相手から通報され警察に逮捕されてしまう。由紀に連絡できないまま、やきもきするがどうしようもない。やっと釈放されたとき、日出男に棄てられたと思ひ込んだ由紀は既にどこかへ消えていた。いくら必死に探しまわっても行方は全くわからないままだ。

——時が過ぎ、由紀はクラブのホステスになって濃い化粧に派手な衣装をまとい自堕落な生活を送っていた。客に情事旅行を誘われ、高い金をふっかけて温泉に出かける。それでも、旅館の枕元には日出男に貰った「ジェイン・エア」が広げてあったりするの痛々しい。翌朝、男と共に温泉場の駅を発とうとするそのとき、「由紀…！」と呼び止められた。

日出男だった。ここでタクシーの運転手をしているという。亭主然としている男を見て、結婚したのか？ と訊く。由紀はつい否定しそびれ、日出男はそう思ひ込む。「ジェイン・エアみたいに幸せになったんだね」。つらい気持を抑えて祝福する日出男は、ホームまで見送りに出る。

由紀たちの様子を「まるで新婚旅行みたいじゃねえか」と言う日出男に向かい「そうよ。新婚旅行なのよ！」。電車が発車する。由紀は窓から身を乗り出して泣きながら手を振る。ホームの日出男はバンザイ！ バンザイ！、身体いっぱい胸の痛みを表現しながら何度も何度も跳び上がって万歳を繰り返す。その姿でストップ・モーションになり、エンド・マークが出る。

『突然、嵐のように』もまた賞賛を集め、『さらば夏の光よ』に続いてキネマ旬報ベストテン第9位にランクされた。その意味で、この両作品は郷ひろみの代表作と言っていい。同時にそれは、郷ひろみ、秋吉久美子、山根成之監督トリオのブランド力でもあった。

●ジャニーズのアイドルグループは東宝で主演作

その勢いでこの時期、郷ひろみ抜きの秋吉久美子、山根成之コンビでも青春映画の秀作が生まれている。『パーマネント・ブルー 真夏の恋』（76 山根成之 脚・石森史郎＋ジェ

ームス三木 原・素九鬼子) がそれだ。

第9章で触れた日活「秋吉久美子三部作」の後、日活の75年お正月作品『炎の肖像』(74 藤田敏八+加藤彰) で沢田研二にからむ少女、松竹『昭和枯れすすき』(75 野村芳太郎) で高橋英樹と兄妹役になった後、東宝『挽歌』(75 河崎義祐) に主演して仲代達矢を相手に奔放なヒロインを演じるなど幅広い場で活躍していた。『さらば夏の光よ』『パーマネント・ブルー』の後にも東宝『あにいもうと』(76 今井正) で草刈正雄と兄妹になる。ただそれらの作品では、デビュー作『妹』の妹イメージや「シラケ女優」と呼ばれ、謎めいて小悪魔的なキャラクターが常について回っていた。

山根作品での秋吉は、それまでとは全く違い、妹でも奔放な女でもなく足が地についた一個の女性だ。『パーマネント・ブルー』では、過激派学生運動崩れの女子大生になる。

四国、瀬戸内海に面した海辺の町の夏。高校三年生の少年(佐藤佑介)は、砂浜に倒れていた若い女(秋吉久美子)を助け、家に連れ帰る。彼の家は小さな旅館で、父(岡田英次)と老女中(南美江)との三人暮らしである。体力の回復した女は、住み込みの女中として働くことになった。彼女の素姓は謎のままだが、少年の眼にはこの年上の美しい女性がまぶしく映る。

町に刑事がやってきた。この方面に逃走した過激派内ゲバ事件の犯人たちを捜索しているという。女は、追われている中の一人なのだった。少年は小舟を操って彼女を沖合の無人島に匿い、まるでキャンプのような逃亡生活が始まった。少年は女を慕い、女は一途な少年を愛おしく思う。島陰の洞窟で二人は抱き合い、求め合う。少年は家も学校も棄てて女とどこか遠くへ逃げ一緒に暮らしていこうと決心する。

しかし、少年が必要な食料や燃料を調達に行っている留守に女は警察に捕まった。戻ってきた彼は、洞窟の壁に女が書き残したメッセージ「だんだん」を見つける。それはこの地方の方言で「ありがとう」との意味であり、いつか少年が教えてやった言葉だった。

少年は独り砂浜に佇み、思い出にと船べりに一緒に書いた文句を見つめる。文句は、「パーマネント・ブルー 八月のいろ ぼくのこころ」。思いを断ち切るように、舟にガソリンをかけ火を放つ。そして、燃えさかる炎を前にただ涙を流すのだった。

この映画の公開は76年9月。その頃24歳になったばかりのわたしは、生まれて初めて深刻に女性との関係に向き合い、ちょっとばかり苦しい恋をしていた。そうした自分の現実と重ね合わせたところもあったのだろう。「キネマ旬報」の日本映画批評欄にこんな映画評を書いている。

【好きよ、と秋吉久美子が少年にささやきかけるとき、その響きのやさしさが心に沁みるように伝わってくる。少年に感情移入して、自分が愛されているかに錯覚する、というの

ではない。あんたのことすごく好きよ、と万感をこめてささやく彼女の方に、ぼく自身と重なり合う部分を見出すからなのだ。

学生運動に絶望し、誰とも知れぬ種の子を宿した体にリンチの傷跡を止め、警察に追われてさまよう女子大生。肉体の痛手よりも、すりへった神経が、さらにいたましい。全存在をかけて信じ、追い求めてきた理想や夢が、けんめいの努力にもかかわらず潰えてしまったのだから。逃亡生活にしても、闘いのために雌伏しているのと違い、疲れ果て、うつろな気持での逃避行だ。信ずる方向へ猪突する純粹さは、もはや失われている。飢えに朦朧として小さな漁師町に辿り着くまでのうちに、そのことを心底から思い知っている。

そのとき、彼女は、もう若くはない。しかし、かといって老成してしまっているわけでもない。生きることの深淵を見、きびしさに気づく一方、しなやかな感性を依然として持っている。少年と島で二人きりの洞窟暮らしをする無鉄砲と、その無茶さかげんを認識している分別とが同居しているのだ。若者とおとなとのあわいとでも言うべき位置だ。

対して少年・佐藤佑介は、若い。煙草をふかしてみたり、パチンコをしたり、それでいて部屋にはアグネス・ラムの写真を貼り、台所ではハツカネズミを飼う。阪大受験を志望して勉強するかと思えば、不良ぶって町をのし歩く。まだ入口に立ったばかりで、何を信じて進めばいいのか掴めていない。体いっぱいの若さを、もてあましていく。力が余って、弾けそうだ。

その、まるで夏の盛り八月の空や海の青い色のような輝きを、女・秋吉久美子は愛する。“パーマネント・ブルー 八月のいろ”という文句で、想いを綴る。過ぎ去った彼女の“八月”への愛惜と、少年のきらめく“八月”への憧憬をこめて。だから、少年はその文句をうけて、“パーマネント・ブルー 八月のいろ ぼくのこころ”と書き加える。まぶしいほど若い。それに向かって、彼女は、好きよ、とささやく。

世の中を知り、生のきびしさを知り、やみくもに突走るエネルギーを失っても、日々生きて行かなければならないのには変わらない。むしろ、生活の重みは増していく。そんなとき、ぼくはちは“八月”だった頃のやわらかな感情を思い出し、それを武器にして立ち向かうことができるのだ。少年を愛すことで自身にもみずみずしさを取り戻した彼女みたいに。捕まって、刑事に曳かれて行きながら、表情には生気が満ちている。若かった時代が過ぎても、そこで燃焼したもの—紺碧の色は永遠、パーマネント・ブルー。皆、心の奥のどこかにその色を秘めている。

山根成之監督は、銀幕というキャンバスいちめん、この青さを塗りつけた。青い輝きを、ただひたすらみなぎらせることで、若さのかたちを的確に捉えている。

デビュー以来のいささか奇をてらった感のある技法を捨て、正攻法で挑むやりかたが、『さらば夏の光よ』同様、みごとな成果を示している。秋吉久美子をヒロインとして得て、十分に生かしているのも見逃せない。今まで〈妹〉イメージで扱われてきた、この豊かな素材に、大胆にも〈姉〉イメージを付与して新しい持ち味を引き出している。それは、山

根作品に登場した女優たちでは醸し出せなかった、甘酸っぱい中に鋭い苦みを走らせた味だ。この調合を会得したことで、秋吉久美子というスター、山根成之という作家は、あらためて、当代の青春映画を代表する存在となった。すぐれた青春映画は、若い観客に支持されるだけでなく、観る側の年代を問わずあまねく感興をそそる力を持つ、との意味で。】
(キネマ旬報 76年十一月上旬号)

●さまざまな女性との出会いと別れ……

この 70 年代中盤の時代、大学紛争はほとんど沈静化し、この映画にもあるように学生運動はごく一部の過激派と呼ばれる勢力だけのものになっていた。74 年の東アジア反日武装戦線「狼」による三菱重工爆破事件、77 年の日本赤軍によるダッカ日航機ハイジャック事件、78 年の第四インターなどによる成田空港管制塔占拠事件のような個別のセンセーショナルな事件が目につくだけの状態だった。

「消費は美德」の風潮で経済発展一辺倒だった高度経済成長は一段落して、70 年に富士ゼロックスの広告で流行語になった「モーレツからビューティフルへ」に象徴される、落ち着いて足許を見つめようという空気が出てくる。また、73 年のオイルショックは経済が無条件に右肩上がりになるわけではないことを戦後の日本人に初めて感じさせた。

その一方で、生きるために絶対必要とは言えないがそれがあると生活をより快適にするものが次々と出現した。それらは、40 年後の現在のわれわれも日常的に使っている。すなわち、71 年にはマクドナルド一号店が銀座にオープンし、カップヌードルが発売されてカップ麺時代が幕を開けた。『さらば夏の光よ』で宏と京子が働くロッテリアは 72 年開業、モスバーガーも同年開業でファストフードも一般化していく。

70 年代半ばになるとファミリーマート、セブンイレブン、ローソンなどコンビニエンスストアが各地に開店、徐々に 24 時間営業になった。75 年山陽新幹線開業。76 年クロネコヤマトの宅急便が始まり宅配便サービスが普及していく。同年「ほっかほか亭」の「ほか弁」を皮切りに持ち帰り弁当のシステムが広がる。コインランドリーが全国的に普及していくのもこの頃だ。78 年には成田空港が開港する。

70 年代は、都会の単身者にとって便利なツールが整備されていく時期だった。「同棲」映画も郷ひろみ・秋吉久美子コンビの映画も、そうした基盤の上に立脚しているのである。郷ひろみより 3 歳年長の 25 歳で同じ都会の独身男性としてさまざまな女性との出会いや別れを経験していたその頃のわたしには、ことに『突然、嵐のように』の二人の出会いと別れが胸に沁みた。次のような感傷的気分をこめた文章を書いている。

【出会いは、突然、嵐のように訪れる。そして、別れも、突然、嵐のように襲ってくる。若者たちは、そうした出会いと別れを繰り返し繰り返し、進んでいく。いわば、人間とし

て成長する過程のひとつに、片思いのようなものも含めて、いくつもの恋物語を重ねるのだ。

だから、ぼくたちにとって、別れは、決して単なる悲劇ではない。一旦の終止符ではあるにしても、人生までもが、そこで終わってしまうわけではないのだ。次の瞬間から、新しい生を生き続けることになる。終わりであると同時に、始まりだ。そのとき、別れという結末に至った一連の出来事は、次に始まる生への跳躍台になる。バネをきかせて、思いきり跳べば、ジャンプの選手が感じるだろう身を締める風圧さながらに、より緊迫した生を飛翔できるだろう。新しい恋物語だって経験できよう。別れは、決して単なる悲劇ではないのだ。

この映画の作者たちも、同じことを言おうとしているに違いない。ラストシーン、電車がホームを出る刹那、“日出男さん！”、少女は窓から身を乗り出す。それを見送る少年は、少女の偽りの新婚旅行へのはなむけに、万感をこめて、バンザイを叫び続ける。跳び上がって、体いっぱい叫ぶ少年の、しなやかな四肢が跳躍したとき、画面は止まり、エンドマークがしるされるのだ。記憶に残る、すぐれた終幕だが、ここには、別れた二人のこれからに対しての、むしろ明るい予兆がある。

『さらば夏の光よ』に続く山根成之監督、郷ひろみ、秋吉久美子の組み合わせは、力まずに、出会いから別れまでを、甘さ、苦さをこめつつ描き出す。たとえば、この少女は、看護婦をしながら通信教育で勉強しているのだけれど、少年に、もっと前向きになりなさい、だの、資格を取れば道は必ず拓けるわ、だのと言う。そのせりふを、秋吉久美子が口にする、あざとさが消え、すんなりと耳に入ってくる。彼女の眼鏡姿が、お堅い感じよりは、ある愛嬌を覚えさせるように。

また、少年にしても、郷ひろみが演じれば、猛々しい荒さというよりは、どことなく柔軟さが先に出る。二人の主演者の、そう、言うなれば、さらりとした調子が、主人公たちの性格、状況設定からすると、ともすれば類型化した像になりがちな危険を回避して、逆に、きわめてみずみずしい人物表現になっている。

さらりと、軽い調子で。それは、山根成之監督の身上でもある。同棲していた二人が離ればなれになって、それぞれホステスと運転手になるまでの時間的経過など、実にさらりと流している。過分の思い入れを込めたりせずに、洒脱に物語を進めていく。かといって、映画全体が、見る側に感じさせるものは、軽くはない。ぼくたち自身の生きていく上で、出会いや別れの持つ意味について、重い問いかけが伝わってくる。

悲しい事を笑いながら語る、笑い話の形を借りて真実を伝える、というのが、山田洋次監督の姿勢だが、軽い調子で重いものを表すことに、山根監督は到達したようだ。日本映画の現状を考えると、そうした構え方は、きわめて貴重に思われる。この映画にしても、いろいろな面できびしい条件の下に製作されたとのことだが、それをたくましくはね返して、さらりと仕立てているところ、やはり、大きな賛意を呈したい。】

●青春映画の巨匠的地位に

この文章の後半で触れているように、山根成之監督の青春映画作家としての勢いはめざましいものがあった。助監督時代の 68 年に同じ助監督の貞永方久との共同監督で『復讐の歌が聞こえる』を撮った山根は、先に触れた『同棲時代 今日子と次郎』で本格デビュー以来一貫して、前章、本章で取り上げた青春映画を撮り続けた。主演はアイドル俳優や歌手であり、話は漫画かヒット曲によるものがほとんどだった。山根は映画雑誌のインタビューなどで自作を「お子様ランチ映画」と自虐をこめて称していた。

ただそれは自虐ばかりではなく、この種の映画を作り上げアイドルのファンたちを満足させてヒットさせる自らの力量への自信もこめられていたと思う。郷ひろみ、秋吉久美子との仕事は、遠藤周作、素九鬼子、幸田文といった文芸作品を原作にもしていたし、「お子様ランチ」の域を超えて社会の中の若者を描いてもいた。

76 年の『さらば夏の光よ』、『パーマネント・ブルー 真夏の恋』でブルーリボン監督賞を受賞し、山根成之は日本映画第一線の監督として押しも押されぬ位置を占めるようになった。受賞後第一作となる『突然、嵐のように』のメインタイトルは大きな文字で書かれた題名が七色のネオンのように煌めく。それは、青春映画作家としての山根の自信の表れに見えたものだ。

78 年には文化放送で「オレンジ通りの映画館」という毎週放送のレギュラー番組を持ち、スターや映画関係者を迎えて語るホスト役を、本職のディスクジョッキーのように堂々とこなした。メディア的にはスター監督の扱いだ。その頃山根から知遇を得て一緒に飲みに来て行ってもらったりしていたわたしは、映画評論家としてこの番組に一度ゲストで呼んでもらったことがある。親分肌の山根は、わたしのよう若い駆け出し映画人にも温かかった。

また山根は、自作にどこかで必ずチョイ役として姿を見せた。仏壇に飾られた遺影の写真だったり、通行人だったり。『突然、嵐のように』ではパチンコ屋で郷ひろみの隣の席の客を演じている。そんなことも知られるようになり、ある日一緒に渋谷のビアホールで飲んだとき、勘定を払うレジで若い女店員から「ひろみ君の映画の監督さんですよ」と握手を求められて照れていた。そんなこともしょっちゅうだったのだろう。

ただ、郷ひろみ、秋吉久美子の共演は次の『ワニと鸚鵡とおっとせい』(77 山根成之)で終わる。しかもこの映画は人気テレビドラマ「ムー」から派生した気配が強く、このドラマで郷とコンビを組んで「お化けのロック」を歌った樹木希林を絡める必要があったりするなどバラエティ的テレビドラマの色彩が強く出過ぎて映画としては中途半端な内容になってしまった。

次の『ダブル・クラッチ』（78 山根成之 脚・ジェームス三木 原・五木寛之）は五木寛之の原作で『さらば夏の光よ』『パーマネント・ブルー 真夏の恋』のジェームス三木が脚本を書き期待されたものの、郷の相手は姉役の松坂慶子であり姉を愛人にした上死なせた男への復讐がメインであり、青春映画の匂いは薄かった。郷の映画主演作自体が途絶え、次に主演するのは三十代にさしかかってからの『聖女伝説』（85 村川透）まで待たなければならなかった。その後、『近松門左衛門 鐘の権三』（86 篠田正浩）、『舞姫』（89 篠田正浩）といった歴史劇が最後の主演作になっている。

秋吉久美子は後述する三浦友和主演の東宝『姿三四郎』（77 岡本喜八）で相手役を務め、『ワニと鸚鵡とおっとせい』に出た後結婚、出産で約2年間休業する。『の・ようなもの』（81 森田芳光）で復帰後は順調に女優としてのキャリアを重ね、『異人たちとの夏』（88 大林宣彦）で助演女優賞を総ナメにするなど、演技面でも高く評価されている。

●シブガキ主演で「お子様ランチ」映画に復帰

山根成之監督は桜田淳子で『愛情の設計』（77 山根成之）、阪東正之助（現・四代目河原崎権十郎）と石野真子のコンビで『九月の空』（78 山根成之）と松竹アイドル青春映画の幕引き役を果たしてから5年後、東映でシブガキ隊主演の『ヘッドフォンララバイ』（83 山根成之）を手がけ「お子様ランチ」路線に徐々に復帰した。

ジャニーズ事務所がフォーリーブズ、たのきんトリオに続いて売り出したモックン本木雅弘、ヤクン葉丸裕英、フックン布川敏和のシブガキ隊は、デビューした82年に「100%…SO かもね！」でレコード大賞最優秀新人賞を受賞しNHK紅白歌合戦に初出場を果たし、早くもその年東映『ボーイズ&ガールズ』（82 森田芳光）に主演、『ヘッドフォンララバイ』の後にも『バロー・ギャング BC』（85 和泉聖治）と、アイドル青春映画と最も縁遠かった東映で3本の主演作を撮っている。

他の2作は他愛のないアイドルものだが、『ヘッドフォンララバイ』には郷ひろみが頂点を極めた松竹「お子様ランチ映画」の匂いを色濃く残していた。その匂いについて詳述したわたしの文章で、この項を締めくくっておこう。

【画面右下にタイトル。“ヘッドフォンララバイ”の文字が、五色に変化する。そう、山根成之監督作品だ。大林宣彦、相米慎二、森田芳光といった作家の映画が、ひとめで誰のものか解るくらいの個性を有しているのと同じく、山根作品も、独自のスタイルを持っている。ひさびさの登場、しかも、『五番町夕霧楼』（80）、『黄金の犬』（79）は“大作”映画だったから、奔放にやれる“お子様ランチ”映画は、何と『九月の空』（78）以来五年ぶりとなる。

“お子様ランチ”とは山根監督の自称するところであり、卑下しているのではなく、むしろ、

少年少女を対象としたこの種の映画への愛情がこめられた言い方だ。で、このシブがき隊主演の夏休み向け作品、水を得た魚のように、いきいきした映画作りを見せてくれる。同一アクションの反復とか、画面を分割しての表現とか、けれん味いっぱいの表現を駆使する。ことに、歩行シーンの工夫が効果をあげている。

初めて酒場へ入り、オトナの美女と知り合った田舎出の少年が、同行のイラストレーター志望の少年に感激を語る帰途の描写。酒場のあるビルから勢いよく出てくるところを繰り返しながら、会話を進める。上気した状態で店を出た瞬間の姿を強調することで、少年の心理をうまく表わす。また、失踪した仲間を、残った二人が心配しつつ校内を歩く場面では、据えられたカメラの前を三度、右から左へ横切らせる。一度目。ひとりが話す。二度目。相手が応える。三度目。無言。これが、会話の巧みな間〈ま〉になる。そして、無言の部分は、字面では“……”と表記されるような沈黙を、的確に映像化する。

物語の方は、シブがき隊三人がチームを組んで出る駅伝大会をヤマ場に、軽快に展開する。舞台となる渋谷・公園通りや、少年たちの根城である洒落たペン트ハウスといった人工的な都会風景ともよく調和している。話の核となるのは、犬の美容師の卵である少女をめぐる、田舎出、イラストレーター志望、友人同士の葛藤だ。共に彼女を好きになり、橋渡し役をしようとしたはずの方が仲良くなってしまい、純情に片思いした眼鏡で九州弁の少年は、きっぱり断られ、ふられる。二枚目風と三枚目風の友人同士と少女との恋心の三者関係—山根“お子様ランチ”の名作『さらば夏の光よ』(76)が、すぐさま思い浮かぶ。

しかし、“夏の光”との訣別が語られた悲しい結末とは違い、こちらは最後まで明るさが保持される。唯一の肉親である母親が倒れたために、大学進学を断念して九州に帰る少年、それを見送る仲間たち、東京駅頭のラストシーンは、少しも湿っぽくない。三者関係のもつれが完全に解消したことを示すように、“また、会おうね！”出てゆく列車に向かって少女が叫ぶ。それから、各々自分の選んだ途を歩む有様が、エピローグとして示される。いわば、『さらば夏の光よ』という短調の曲を長調に転調した変奏曲だ。いちばん風采のあがない田舎出の少年に中心を置いて描いていく方法で、変奏に成功している。

同時に、シブがき隊のうちひとり地味なフックン・布川敏和をこのポイントとなる役につける試みで、集団アイドル映画の定石を破ってみせる。三人の比重を、たくみに均衡させ、スターである彼らの魅力をまんべんなく映像化する。今をときめく森田芳光監督の手がけた昨夏の『ボーイズ&ガールズ』に対しても、一枚上手なのを見せる。山根成之、健在だ。】(キネマ旬報 83年八月下旬号)